



重修真書太閤記

九編
七



13 特
459
87

消
福
流

重修真書太閤記九編卷之十九

中川勘右衛門尉高之我意と振入事

并梶川平九衛門尉正繼中川と殺事

同
攻
印

中川勘右衛門尉高之北畠殿の番頭あり禄も五
千石餘と領し尾州丹羽郡犬山の城代たりし今
度秀吉の味方江州侍の隨一蒲生忠三郎氏郷へ定
めて千草越より勢州へ亂入をるあらんをれを防
ぐよの嶺の城ありとよらめとと佐久間駿河守正
勝と大将と中川勘右衛門關甚五兵衛と加勢と
して差遣るしけるよ天正十二年三月九日の曙よ

大月己心編卷十九

蒲生忠三郎氏郷生年廿九歳江州武者の大将と
て長谷川藤五郎日根野備中守とよひ瀧川與力の
侍と引率し嶺の城と攻むるも久間中川關
城外へ切て出川と隔て拒む戦ひし共城方打よ
けし久間駿河守正勝腹切んとひひける
山口長次郎重政と諫め敵と追拂ひ城よ入
ける關甚五兵衛の返し合とて戦死したり寄手
城門と攻む急ありしとも正勝重政手はめく
拒くも寄手引退しとも援兵もあひまの
正勝遂に城と開く中川も城と出て大山へ歸らん
とと處と梶川平九衛尉名乗うけとあしと切殺

と其故のりよと云ふ梶川平九衛門尉正繼の父と
楠彦右衛門正治と云美濃國池尻よ注しあうの池
尻彦右衛門と名乗織田殿よ仕ける梶川平九郎
信時の壻とありて又梶川彦右衛門と云長男市郎
右衛門正信の織田備後守殿よ仕次男ハ即梶川平
九衛門正繼あり北畠信雄公よ仕ける尾州犬
山の城と預りける中川勘右衛門犬山の城代た
らんこと庶幾平九衛門正繼を様々よ説言して犬
山の城の預りと止め足輕の頭として長鳴よ住を
けり平九衛門祿五百貫ふとも至て貧窮ありと
ととも武器のいよよ及んば足輕の手當をて同

僚と越たりしやと組下の思ひ付す別てよろ
しめりけり然るに梶川よ一人の妹あり容色よ
そよ女功のいふまでもなき手うら花結ひ絲竹
の道すてあふあふさうりしう清洲長嶋うけ
て此妹ととりくよひ沙汰しひるまよりいつ
う中川もあはれと聞付媒とたのむ平左衛門尉よ
ひ入たり其頃中川の禄三千貫よ及ふ大禄あり
つゝの家老職あり妹のさめふ仕合との縁とおのひ
りまとも平左衛門尉身上あはれ妹の身の廻り以
下手道具すて勿々急よ取賄ひうさしとて是と肯
び然るに中川の見ぬ戀よあとうさしさうりし事

首尾と整えんとさあはれいんとも鬼角平左
衛門尉よとゆゑの媒もとんうさあ終よ
中川よ是と断りけりし中川大は腹とて我さ
さよは取あはれさのさの殿の御前もあはれ
あは然ると定めて犬山の城代と某つ申とよ
て改めらるゝあはんと夫と遺恨よ思ふあはれ
よよそれあはれ又此方よも報答とてさ道い
まよはありとひたりけり果して例月朔日の禮
として諸士出仕しける時平左衛門尉もつもの如
く登城しける信雄の御前よ召よ其方事へ北畠
家よて新参あはれとも織田家譜代のののいさる故

二鉄炮とあつげ物頭よあ置つるも身上あ
い由ふと平日過分の奢はる故あり五百貫の
禄と妻子と養ひしうも福有のめのも有と
然る平允衛門尉は無妻あり尤様ある心掛あ
さ侍北畠家よ入用あげしとも實家の由緒もあ
へ扶持し置あり依て鉄炮と返し足輕ともと取
上るありとのい渡されけるよあり平允衛門尉の
面目と失ひ退出をとあけける處へ中川出來り
今日の御首尾あし氣の毒よ存とるなりま
あう信雄公の御氣質知あふとくなり定めて又
思ひ返さるることも早うなり氣よとくけあふ

あと取あしその後鉄炮の明早朝返納あふと
輕に其時直よ引とるこさるへと申達しけり勢別
よて五百貫とつよの頃元黄金十五枚の直ふ
り十五枚よての大依米五百廿五石許と買へし五
百廿五石の四斗入とて千三百表餘よあはる其
翌日目付役多門官左衛門武具奉行波岡權大夫梶
川の家よ至り鉄炮と請取是と改め見ると筒の掃
除も行とく磨こも念入玉藥との外胴亂玉とさ
し火繩とて鹿畧よとて處あり又足輕ともへ引
けりあつて臨み涙とあふ今まのめり頭役を
知さるあとの情深さごとく感し名残とあはるけ

大岡記九編卷一七

四

るとあり是は梶川我藏入の五百貫と引分百貫の
組足輕の手當百貫の鉄炮の修復料二百貫へ我家
來の料とす。残る百貫を以て我家事を賄ひし故
に家事の五百貫の侍に比つて殊に貧しく見えし
なり目付衆の事を聞て肝と消さして奉公に勉
めて家事よ之りうる道理あり得りし侍とてあ
りけるものと知れぬ大將の頼母のしるはと
いふものもあり理の南朝第一の忠臣楠村末葉を
是のなりしと知るものもあり梶川の犬山の城代
と取上らばしも信雄の心より出しとありぬ又今
日物頭と止めらばしも信雄の心あるべし眼のふ

と大將の處置をんりともなりしとおのひける處に
人有り告げし御邊の妹と中川妻とをんと申
をし由それと御邊のありし故に中川ありし憤
りめくる始末に及ひしなりしと内府公の仰と
て平左衛門尉の妹と奥へめし出されそのうち御
意よく中川妻に被下しとまを申上りし内府
公の中川に申すこと御承知あそしつることあり
御邊何とうなりしと申けるより平左衛
門尉大いし悪し中川めり拳動やその義あり
は犬山の城代とも中川めり奪ひしからぬ武士道
よとのこと中川めり人非人とい彼あるべし欲と知

て義とらび色と重んじて禮とてさすくぬ畜生
武士といふく我妹の夫とせん牙とて躍り上
り躍り腹立ける暗愚あれ共大将の父祖あり
主人たる織田との子あり恨むくよあはれ只
みくさ中川勘右衛門あり是も赤意趣と晴と時
もあはれと更よ心よもうけを除我身の武邊と
さう居たりけし物頭と退られくも從者事
めく平左衛門の貧乏あはれ侍一通りのと
しも負うく真の武士とへ彼あはれと家中の評
判さういひりさう中川又始さうあひのり
いろと諛言いけるよ終り梶川平左衛門尉が

五百貫と没収し長嶋と追出されたりそれよも梶
川とていものちの武具の長棹いさめとなく
めさうけ白昼長嶋と引退さけり中川あひ
まはれ梶川と苦めて意恨いさすともあはれ
あひのひ女とへ取逃しあはれも快さうく無念の
月日と過しける内よめさう世間とさう中川嶺
の城よあはれと聞て梶川平左衛門尉上方勢よ加
らう嶺の寄手よあはれ居たりけるよ中川嶺と出
て犬山へ落行よと聞出し梶川平左衛門尉此時
いろとあひのひけし池尻の藪さうとて待人あ
りと神あはれぬ身のいろく知へさ中川勘左衛門

馬とくわめて馳過げると追つめてそれあるの中
川勘左衛門う珍し中梶川あるとと名乗ゆつあや
鍵引とくわめて突く如法深夜の事といひ思も
ぬこしと肩さう突きたる最初の手
疵いけし太刀へ抜ても腕もさうあゆみ様
へ働くを上段下段下々と戦ふと中川次房
と請身とありけるを付入て勘左衛門う左の脇腹
くこと突ぬるをたうされとも強氣の勘左衛門太刀
振あけて梶川う鎗塩首切折の梶川をうさび二尺
八寸大兼光の刀と抜て中川う肩先より乳の下ま
て切下たり深手ふれ何うのめつたまるる

そのまのくを倒すと起しもたてはあはく
首とく落し我陣中へうつりといあり

池田勝入齋父子大山と攻る事
犬山没落清藏主戦死の事

梶川平左衛門尉へあゆみ本意ととい中川
う首と取て寄手の陣より走り歸し寄手の隊將此
事と聞直し宰相秀吉卿のめくと言上をう其
手柄とあつく賞とくさ中川勘左衛門へ信雄
の方より一万二千八百八十貫文と領したと梶
川の身上より三十倍もといふのなりそれと
たよく討取り我此度の軍より勝へき瑞ありと

深く喜ひむひけり又大垣よてハ此事と聞犬山ハ
主将ありつさや一計策して是ととらるる日
置三藏と犬山へ遣くけり是ハ勝入齋元龜の初
信長公より拜領し一万貫と知行しけり是ハ普請念
入て塀築垣より手固くありけり天正九年
織田源三郎殿と塔とて犬山へ納奉りける同
十年六月二日源三郎殿京都より戦死ありける
尾州一圓信雄の領となりしより犬山よ梶川を
置と直と取放して中河を城代とす
されハ中川も犬山の町人よ親しとあけさハむら
しらの池田と慕くありけりも理あり三藏犬

山よのり本來當城ハ勝入齋の築あり
此度當城と乗取んとおのりしより
申たしハ町人共同心し明後十三日の夜舟と
渡し御人數引入申へくハ必その期と御違あるや
此方またしある證據あり御疑
心もあるへくハとて人質二人とてけり三月
十一日の未明より日置大垣へ引くへ此由と申け
しハ勝入齋おとり上りてあれと喜ひをさやうふ
陣ふとるしと腰兵糧一日分の用意して十三日大
垣と立北方のよりしより小船と多く荷ひ東とさ
しと馳行せしとこの渡より亥の時とおるしと頃紀

伊守十艘の船にて岐岨川と渡り城中へ忍び入る
あるも関の聲と上たりけり城中よりいおのひも
あつぬ事ていあり中川ハ討と折あり上と下へ
と仰天一防くへさ氣力もあつ妻子と隠さんとあ
しとろろと廻るのものを斬てとて立むらふめの
ハ組あきて首と取けるを見て勘左衛門尉り叔父
よ清藏主といふの有りさう諸士といひめてゆ
の具さを勘左衛門尉りてとてとハ聞ともい
まの目と目と見合をてとよもあつ敵のこころり
て説ころも知へうらうら遠州濱松より加勢と
出さる由ハたうありとてとてとてとてとてとて

あハ開運をへさつり我と手本とをてとて呼とろり
呼らり切てハ棄拂ひてハ切あとしけるを見て城
中の兵士大よ力と得のさこたつと呼あつめ持場
持場と固めさせ清藏主らう廻りて下知つと
とも在地の地下人とも池田と慕ひてその勢と引
入一處ありてとつ紀伊守之助血氣さうんの若武
者あり相従ふ侍ともよハ渡邊鞆負河合又左衛門
片桐半左衛門尉のつとも聞え老功の名人あつ
バ攻口と明て手まげく攻らうの城兵大うと落うを
てあそく兵もあ清藏主只一人心やくとらり氣と
そいさうと働けとも崩とらうとて勢あつハ更と

のりうとへて体もあしとりくをる内は勝入齋も
を来り荒尾四郎右衛門以下鬼神とも欺くとい
うの侍のつとむも年来の旧地あり故郷よりり
し心地しく案内を知らたりこころゆきこころ攻入て
とこ間あひまの清藏主も力屈し氣摧亂軍のうち
ふ討死を行年の五十八歳その家も生きたれとも
一旦出家したまへあつうとも人の笑と得へさ
よあつば然るゝ姪の勘右衛門犬山と出て崩の城
へ加勢へ行ける時打まうをを頼むといひたの
めといひつる言の葉と恥てうくありぬることを敵
も味方も一同よあふあふれといくとぬ人あそあ

りひと大将戦死をト上の残る兵あるひの討とあ
るひの落行あつるこまあり行の城は終つ落し
けり清藏主りこころ鎧の引合は挟らたると紙
身なりしへ行くこののふうのまひひしとあ流定らるけん
と書てありけると見る人びとこころありゆり勝入
齋父子の手をくめ軍に勝たるとへの始りしと
喜びける十四日の早天よの城下の年寄肝煎ふ
といふのの先よ立て町人百姓とも旧主の入部
と賀し酒肴とめこをく目出たりけりよあり勝
入齋もまあくと引出ののあつ酒のものをあつ
て町の役とゆるしうのさか万歳と唱つて喜び

大問記の編纂一七

あへり其後森武藏守長一遠藤但馬守の許へ犬山手
入し由と告知を志せしらく軍勢と休めける處へ
森武藏守遠藤但馬守より來り今も始ぬとあり
ら池田家の武勇たのりし事といひ様々祝詞を
つひつづけ此勢よのり此近邊を放火し敵の所を
つふさをとめと勇立けるを勝入齋元より思慮
深くぬ人あまの興あることあり然あう今日
一日の休息をへ明日の近隣を焼くことと
しと定め其日の一日酒宴し士卒とたのしむ
ゆ十五日卯の刻に池田父子小牧山近邊すを勢と
いしに在々所々一宇ものことさば放火し心地より

とて関と發そのまゝ犬山へ引返しけることあり
森武藏守の濃州可兒部金山の城に住む犬山の
北五六里あり遠藤但馬守の濃州郡上郡八幡の
城主あり
濱松勢の十四日御先手松平主殿助家忠大須賀
五郎左衛門尉康高以下伊勢國衆名とさしを發向
ありける處犬山落城の告あるより一部川あり
引返しあひひける御旨より酒井左衛門尉忠次
松平主殿助家忠兩人の衆名より其邊で巡見
十五日酒井忠次松平家忠引返し清洲に至り
頃池田勝入父子の兵士小牧山近邊で放火しける

とて煙とてく空よあひさけるを御覽し池田勝入
 齋ハ尋常の侍よあはれ等閑よとてくへさよあ
 らひとて御勢と小牧よあはれむけあへん勝入齋も
 是と聞早々よ兵馬と納めしとたり濱松勢ハ清洲
 より三里おし出落合といふ處に陣しあふ
 甫庵本よハ十四日の夜清洲よて軍評定あり小
 牧山と城よあはれ秀吉の出陣を待て對陣を
 へしとたり十五日午刻清洲と發途ありて小牧
 山へと急さあふ處よりの邊よあはれ烟天とて
 のろろ関の聲天地と響く聞えけるよあり叔
 ハ勝入齋焼働さよあはれあはれ急げぬくと鞭

とてあめけるよ勝入齋人数と方々へ分遣し
 一時よ仕舞て早々よ引入しとたり清洲よりの
 御勢ハ二万余騎小牧山よ到着あり近邊の長百
 姓と呼出し池田り容子と尋あふよ己刻より
 よ二三万よりりの勢よあはれ來り手分しと在
 在所々と焼ゆりく一時よ引上しと答しりハ足
 摺しと悔しあへともうひなりとあり
 みれハ小牧山と敵よとらまざる様よとおはれあ
 しとたり犬山ハ池田よとらまざる此と足たあり
 として三州へ切入へしとありあはれよあはれん但犬山ハ
 ちと遠し小牧山ハ究竟の要害ありみれと秀吉よ

とて軍中と六ヶ一なるへ秀吉の勢十
餘萬ともいへ敵地より來り長陣をんよハ要害の地
ととおのふあめ此邊より小牧山初との處ある
へうらむ然いりるもく小牧山よりゆ備と
立へさなりと仰らましうの諸將つらまもふの義
は同一ける由と池田り忍ののの聞ゆる夜のうち
よその支度となりて是と妨げんと用意を」とか
り

重修真書太閤記九編卷之十九終

重修真書太閤記九編卷之二拾

池田勝入齋小牧山の邊と燒事

并森遠藤羽黒表へ出張の事

池田勝入齋今年ハ四十九歳より秀吉郷と同年
ありきりるよ秀吉郷ハ今年ハ軍ふ克て率土の大
名小名と心服をよめ武將の鎡基ありて定まりた
りよ勝入齋ハ今年戰死をその運の勝劣日と同
しよしよよあはれ但秀吉郷ハ本卦噬嗑の九
四あるよ今年三月漸の初六よ當る即火地晋の卦
とある晋ハ昇進の義あり勝入齋ハ本卦賁の上九

あり依て今年四月飯妹の上六と得て火澤朕と
る朕ハ朕乘と云て万事をむとす心と一又朕
違といふ猛将勇士といふとも天道の循環のうる
れことと得と奇あるるか爰に勝入齋の嫡子紀伊守
之助と共に家臣渡邊河合日置片桐荒尾等と率ひ
て尾州犬山の城と乗取それより森武藏守遠藤但
馬守等の勸より近邊を放火して武威を示さる
やとて天正十二年三月十五日早天に犬山と發し
小牧山西北より兵士を分ちて四方の在家を放火
しける元より老功の勝入齋あるに諸方より遠見
斥候と出し置敵の變動探り諸手より下知を傳ふる

進退の作法ものつゝ天晴累代弓箭の家の
故實と知たり去程に放火の煙四方より満々迦樓
羅炎天と焦して焼立し其邊の百姓地下人大
に驚き親を負子と抱へ資財を棄ておのり様々逃
散たり此日濱松の御勢北畠殿と共に尾遠三の兵
士三万餘騎と率し清洲を進發ありて小牧山の良
の山に要害と構ふ是に秀吉の十三万餘騎を喰
止らるへとの計あり然るに放火の煙西南より
ひさびさ小牧山の上へ真黒となりて其際炎
燃上るこま實よとこま見えその方より當りて
鯨波の聲をひき聞えけるより遠三二州逸雄

の若殿原とて池田勝入齋大山より打出たると
覺ゆるど早馳合とて駈ちつとて透間あつとあつと
馬に鞭とてうちて走けとて誰うの少も猶豫つと我
劣らとて押出に濱松の御旗の信雄公より五六町
も進んで押出しあへ池田う斤侯おれを見て速
ふおれと勝入齋告たりけり勝入齋おれを聞
おのひし車と長嶋のぬく若殿あつと此煙とて
とて逃支度とてあへ給らんとらん遠州の侍衆何
とておれと余所と見ん急度打出るあるへと
し今日いたる景氣と見んとの働さなり爰へ取り
けりとて危ふりうへと早々人数とてとめて引

退くと揚螺と吹立とて走散たる池田う兵
士忽一所と集りてのく一同と申ける遠三尾州
の勢三万餘騎小牧山より良ふ當りて陣を張る
と見え申の早々駈向ひのしよとてその備のあつとぬ
らちと打散し可申いと注進しけると勝入齋聞て
覚ると打とてひれもあるへと龍もあるへと早々大
山へ打入とて下知とて紀伊守之助大音聲と
何とて尤様お臆しあつと我々う勇氣あり候も
知召つらん其備らとて打とて兵家の庭訓あり
といひとて勝入齋大とてこれを制し其方共尤
様とて危ふりうへと久間玄蕃う破とてと

とわのこひの勝家止めし時止まりたるにあ
とわのこひの負へて敵の備の定まりたるを打
とつへとも今遠州勢の軍立を聞い少もとさたる
處なりまはら駈らる若武者の味方を誘引せり
ことよそれに乗るといひある勝入あり今日軍
へ此翁よりせよと云つ馬の頭と立直し
犬山さして引返と遠三の若殿原走付て見つこと
へ遠松の上は旗ありあひさ池田陣と其處ふ
へ焼棄たる篝と竈の跡のこゝへ人氣あひま
あされしく其由本陣へ注進とれへ濱松よともさ
といふを並々のののよあつと仰らしたんは

其方共の手よ逢ふとの勝入ありはとうち笑ふを
あひしなり若殿原力なくあひつとへ此競ふ大
山へお寄たら一めと採落さんとひしめくと
先手の大将松平主殿助家忠酒井九衛門尉忠次大
須賀五郎九衛門尉康高追々を付さとも池田
勝入ふと程軍畧またびつらんといふのひもあ
は能圖よ引上りののうあ今とあ遅うりあ我
々喰付て犬山よても付慕ふことよ残念なること
をのの哉實よ織田殿の軍ありと能りともへ
るののめかと大息繼て感しはつと面々あ
むと届さたる老功の侍よ向ひ軍をんと容易との

らし各々の心よて何とあるへこそ御下知と待て
 手柄へあへと諫めけし何とも拳と握り牙とり
 むろとありて五六町隔て森のあゝと鉄炮
 の音しけるありてと引残りける池田勢ある
 そや我々も向ふと覺えさうそや掛りて踏込めを
 と勇たてて松原遠く池田勢五百騎旗五六十流
 おしたてて静う引てゆく有様と見るあり三列
 勢是どの是非追止んとすける酒井左衛門
 尉忠次大さし制しけし三列勢あゝと小勢と
 て引ののど追ぬといふ法やある我々う得ののあ
 う見物しとあをさうといひけるを聞て左衛門

尉のや左とあゝの今何時と思ひあふその勢と
 追て犬山と至らんあり早夜入へ一夜軍へ難
 義のののなる上殊と不知案内の處なり軍へ今日
 み限らしといひて落合郷の御陣を取巻陣とと
 不爰と森武藏守長一遠藤但馬守繪基へ放火の事
 と勧めあう其事みることと無念ふあひ
 其勢一万餘とて羽黒の八幡林へ出張と羽黒とい
 ふの犬山と小牧の間あり然も池田父子と牒し合
 をもせ此由遠州の御陣へ聞えけし酒井左衛
 門尉忠次を討て上方勢と手合と一塩付らぬ
 と言上しけるも實も然とて御免ありし

へ松平主殿助大須賀五郎左衛門のろ共ふ十七日
 の早天より八幡林とさして發向と其勢らつふ
 七千餘騎森遠藤一万余騎と追萌さんと掛ける
 と上方勢の其中より仁料權太左衛門と名乗郊花
 あとのの鏡普月毛の馬に打のり淺黄の羽織着た
 る侍歩士十四五人と引具し走廻りけるを見て奥
 平九八郎信昌のこれ敵や鉄炮よく打落さんへ安
 けきとあまうみ情あつて一鎗とりけ向ひ川中
 まで鎗と合をけるう何とうしたうげん仁料奥平
 の鎗と請損し忽ち川中へ突落さる仁料起直らん
 とこる處と奥平り郎等夏目外記落合て首と取ら

ことと見て森り手ののの奥平と追取巻られ打取ん
 と進みうら松平主殿助酒井左衛門尉とつとあ
 めいして走りける森り手の者防さうの色めさ立て
 見えつと武藏守自身馬と乗出し真先よ立三列
 勢森をい見知たり是を聞ふる鬼武藏守千騎り一
 騎よ向ふ首あり脱とまると穂先ととるへく突め
 うる森の血氣の若大将あり士卒とつとめて此を
 死場とおのへか火水はなうてうをさけり遠三
 の兵士と東美濃の侍とい互に見知り中あは汗
 と血よびしと戦ふるとよつとつア共見えさ
 うげり爰よ遠藤但馬守いところ川下み備と立て

大問己乙編卷七

森り戦ふを見物して居たりける處へ大須賀五郎
 左衛門尉康高を掛りてとて御渡りけり遠藤殿
 う是へ大須賀五郎左衛門尉ありて千葉の平氏
 あり見參申と名乗るけり鉄炮二三發打おのけ
 して川とてとて切てりける此時奥平う後陣の兵
 士ありて川と渡りて切りて上方勢ありて
 め引色ありけり大須賀五郎左衛門尉丹羽
 勘助ありてのめゆ兵とも軍のめゆをてとて敵
 向て組て勝負とてするのめゆと勇めつりてめ
 れ潮の涌り如く寄けるよありて森の手
 へ遠三の兵士のめりて川と渡りて處とけり

て半途と討んと支度とて大須賀丹羽の兵士
 先とけりて遠藤の計畧つりてとありて
 い遠藤も火花と散り関の聲と合を追つありて
 東西南北へ月と星の大旗小旗入めりて打あり
 りて死生とてとて切合たり武藏守へ味方の敗
 りて見てとてありての共と大音ふりてり
 け鎗と打ありて遠三の兵士の競ひりてと突ふ
 を突ふと進いりて十三四人の手の下に討りて
 武藏守此勢と拔をふと呼りて突立とて奥平
 う勢心へ健けりてとありて一二町とありて
 うけり大須賀遠藤の戦ひ互に知りて中と

勝負も見えぬ
のひ名と惜む勇士ふとへ入みされ入りより更ふ

酒井左衛門尉奥平九八郎森遠藤と破る事

并野呂助左衛門尉父子戦死の事

森武藏守の先手をとて引色見えし武藏守
自身鎧と取て三遠の勢と二三町追くつ猶も奥
平と目よけ走めりて下知る處へ松平主殿
助究竟の兵士六百余騎と引つ上の上の瀬とこ
森り横合へ突めくる森り兵士前より奥平り軍
けしく透間あけ汗と流して戦ひを急めると横合
より又突立ちると狼狽せりかひととも武藏守り

福て鬼ともそれ侍あれハ事ともを以切てハ突
つきてハ切右往左往よりけ立けるより主殿助
の勢あると詮度と立ちると火花とちりりして戦ふ
たり奥平九八郎信昌今年三十歳氣のさりん
て武勇ハ世よ許さじ侍あり主殿助の荒手と見て
大よ勇たちとて敵ハ色めくと我よ續け侍と
のと聲と揚鎧と取て突りりりハ森り侍手の
下よ五六人突伏らるとさうめくる處へ遠藤横合よ
り切めると約束なり但馬守ハ大須賀よ
り立ちると今戦の急あるより森を援けく横
鎧のひもよりハ森ハ奥平と主殿助と小向ひ千

騎一騎より入る軍の命を切らりあり逃て
いづらの月日と經に進めくと手ののめのと勇めた
て死ハ一時と名ハ万代に傳らるのめのと逃て先祖
と汚らるや嗚呼死たりとはめらとて子孫の眉
目とろとへとや我を見習へ侍ともと鞍の上より立
上り鎗と握て突たつるわとと萌とりくり軍勢
も又のり返し主と續つて戦ふとされとも奥平
侍とも主殿助ととくられと恥しとおのひ
しりの親うとてとも子たをけと兄手と負とも弟
めつりとい踏ふへく進むけるあより森り手あて
らと見えさうけり武藏守齒咬とあり是とて討死

一名と後の世に殘さるやと馬と立直し既と遠三
の勢よりけ合をとととと橋本平大夫川崎小次
次響の七寸と取付あつた大将の死しあふ處も非
と御短慮のと引立りうの武藏守心のあつてけよ
やととも手ののめのと悉く逃るをけるよあり心あ
ひ引退る敗軍とあめめと扣えさる遠藤但馬守と
大須賀五郎左衛門の元是一流の平氏あり互と意
趣へるげととも義よりて敵とひり味方となる
逃て先祖と辱しめんより死して孫子のあつてと
起を命の輕し名ハ重しと鎗とけつり穂先ととろ
へ一寸も引り引ふととちりめて突合追つるこれ

つ戦ふ處へ丹羽勘助大湏賀と援びて真一文字よ
 馳くくる丹羽勘助氏次今年三十五歳皆力さうん
 ふ氣たびく遠藤と目よりけ餘さしと舉動の大湏
 賀よりとく力を得三尺さうりの大身の鎗と打あり
 打あり進むける体へ仁王と作り損をさうり如くよ
 を見えたりけり遠藤但馬守心さうりの猛びとと
 丹羽り死力と突萌され既さうりさうりけり
 家の子ふ岡村彌大夫儀上文右衛門以下十三人枕
 と並へて討とける其間と但馬守の虎口とのり
 森と一所と犬山さうりて落行けり遠三の若侍とれ
 と追んと進むける酒井左衛門尉と見えて味

方と制し備と立静々と是と追掛くうの遠藤と森
 との兵士等定めく遠三の衆備と亂しと追掛るか
 らんその時大返さうり合をんと討りさうりの
 共酒井左衛門尉の軍ありと見えてさうりの備定あり
 手配さうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 さうりと直進さうりさうりさうりさうりさうりさうり
 此れへ我等一人の恥ありとと只一騎引うんと宗
 長その日の黒系の鎧と赤熊の冑と着黒と猪毛の
 馬さうりの三尺八寸の太刀と以て十七八人手の下
 む切て落し心地よげと切て廻さうり勢たびく三州
 勢も思とれ跡さうりさうりさうりさうりさうりさうり
 助左衛門大音

小美濃侍のうらむとあるやうなところをめぐり
操引と引けるものと三州勢むらぐらつと追掛ける中
おも松平又七郎家信生年十七歳真先と進み大音
母衣の出しと見覚えあり野呂助左衛門とてい
無やとさあくも後と見とることもと聲くくし助
左衛門馬と射さそとて歩立あり又七郎と見返りお
しと若ののうか我子の助三より弟あるべしとお
のひつと切合い又七郎り郎等松平但馬守とより
来り能くあへや敵の請太力なるをと聲とけけの
川見物を助左衛門の大太刀あり又七郎へ小太刀
あることも早うりけまの助左衛門跡とさうり引け

ると又七郎押しとて無手と組り助左衛門の大
力あり又七郎と組敷首とめんとけける處と
但馬守落合處へ又七郎り近習と關口杏九りけ寄
て右手の脇とさくんととる助左衛門搔つと
て三間ぐらうり投出しける其跡へ小嶋瀬平逸見彦
六以下七八人落重ありと終り助左衛門とて倒
をい又七郎り返り終り首とくと落と
浦庵本と羽黒の東山際とて野呂助左衛門と
つてうへ討死としたり長子助三八夢もも知
を五六町も退し處と助左衛門り馬取のめの見
えたり助三呼寄て父の行衛と問と敵六七騎追

大陣記九編終

大陣記九編終

うけ来り母衣の出し見知たるど野呂助左衛門よ
てい無うとていひの後も後とてせいのうか引返し勝負
あへと云へ處と此小刀とて子とののうとてとるり
仰らして討死しあふとあり

助左衛門尉り長子助三はこるう退たりける
助左衛門尉討死のしと聞て馬を引くし
敵に向ひ是の野呂助左衛門り嫡子ありといふ處
へ助左衛門り口取男り来りしうの鬢の髪と
切汗巾と取そへ故郷の母と妻との許へ持参とへ
しといひ捨敵の中へ駈入て手負獅子の如く切て
廻りしうの遠三の兵士大に切立ち色めさける

ふ勢を増いし進んで戦へ遠三の兵士たちもつて八騎
切ることさるされとも續く味方あり大勢と取あめら
大童よりして戦ふ處へ松平主殿助家忠を求りそれ
あふの野呂助左衛門尉り嫡子助三と見らる僻目うちと
も退めと聲ひて鎗と合をける助三は太刀を以て
切拂ひくたけり立て戦ひける主殿助浮つ沈つ突
くし終る眉間とをり突痛手をかきとてし
たもし馬より真逆と落ける主殿助とて馬あり
飛下てし首とてあつてそのまゝ鳥付の緒は付
たりけり遠三の侍ともまて勝りたり此勢は大山へ
あつてし一時攻め攻めと池田父子と打取へ

いさゝかといふと大須賀五郎左衛門尉酒井左衛門尉くく制して
追ひぬ是れを勝る軍ありされとも味方今朝より駆し
りて士卒も大将もつらなりとの上は犬山まで押ゆるん
まゝに疲るべくつら勝軍を敵とあかるといへば味方
の兵氣驕りて勝の機といふべし犬山に籠る處の池田勝齋
老功の古兵あり城にこゝるとも軍の氣といふなり知らん
と今日敗軍とあり返さんと云ふとあると處ありて
て勝ん道理ありてつらばたてし面々のいさゝか處もとて
つらも今日の始末と言上し御下知と伺ふべし討取
處の首数三百余級と實檢し入味方の討死は七十余人と注進
たりけり
重修真書太閤記九編卷之二十終

大須賀五郎左衛門尉

五

重修真書太閤記九編卷之二拾一

池田勝入齋稻葉入道犬山に備る事

并三遠諸侍池田勢と欺く事

爰に森武藏守長一遠藤但馬守胤基自身の勇氣と
たのこゝ他の勢と交へば羽黒表八幡林に出張し
遠三の諸軍勢を一ひしとて挫付んと敵と侮と
しり却て奥平九八郎信昌大須賀五郎左衛門尉康
高酒井左衛門尉と突崩され野呂助左衛門父子と
くしめ仁科權太左衛門岡村彌太夫磯上等名ある
者多く討ち味方大に敗軍しけりいさゝかせん方かく大

大須賀五郎左衛門尉

山さへ引退く然るに犬山より池田勝入齋森
遠藤り手勢ころりとして羽黒の八幡林まで出張し
たる由と聞眉をひそめ大息繼て申けるハ森武藏
守ハ年若くして武勇ハ相應なれとも思慮短り
遠藤ハ老功あるもの共に出づること愚り
よこむく今ハ遠三の勢に追立ち見苦く敗軍を
アハこれと余所見んと口惜き次第ありとて稻
葉右京亮貞通と呼近付いさや八幡林に打出味方
の敗軍と援けて遠三の侍とも打散さんと勇ま
とけると池田の家の長臣片桐半左衛門荒尾四郎
右衛門進み出て武藏守殿但馬守殿羽黒あめへ

出張ありハ前日放火の事と兩人ありとてめ
仰らるしよその日やうして打出るはさうと
残念と思ひぬ態と當方へ無沙汰あるされしは
り然ると當方より御加勢いり定めて兩人とも本
意あくおわしめさるへ今少し御見合その機變
ようして御出陣あるへくいと諫めけるよあり勝
入齋も龍の次第あり然者犬山の段へ打出し候
と以てその舉動と窺ふと申けるよあり稻葉
右京亮貞通今年四十歳真先は打出けるよ父の一
鉄急度見て其方未練あり我等年つりて六十九
歳軍よありと十六歳の初陣より大小七十餘度森

遠藤の兩人今も追立らばこの所へまげ来るべし
と云言葉のいよいよ終らぬうち森遠藤の手前者
追々も逃來り遠三の勢おのひの外強く味方
散々も打つげさう早く御加勢いへしと注進しけ
る處へ森武藏守遠藤但馬守鞭と燈と合せて馳來
る池田勝入齋兩人に向ひいり武藏守日頃の勇
氣も似も付げ見しめある有様や但馬守の老兵か
りまうると思慮る軍の次第うかひて入道一お
て當て壻の武藏り恥辱と雪むべしとの共繼げと
馬も打のり打出んとあしけさへ片桐荒尾以下馬
の前よりげふりうさへ物も狂ひあふり敵へ勝軍

しと勢たけく然も酒井左衛門大須賀五郎左衛門
あとの名譽の侍多くその上は物見と出でて能々
と探らさし前田備後兩脇備とあしけさへこの
樹蔭敷のむとりふろをいと聞左様の處へうけ向
ひりあく味方と亡さんと近頃以て御短慮とい
と申をしり勝入齋のやく敵も備あまの味方よ
も亦備あり伏兵とくく軍りあるべしと云て
既も馳出んとあしける處へ伊木清兵衛と申し來
る北畠殿の御勢とあしける二三万餘も大垣表
へあし寄ひ由只今斥候のめもの注進いと申しま
へ勝入齋さもあるべし然へ此勢もつ犬山も入て

大田記九編卷十一

三

大田記九編卷十一

五

手配と定め大垣へ向ふへしとひし時遠藤但馬
守勝入齋も向ひ申ゆる遠三の兵士多しとて
とも酒井左衛門尉智慮深き大将と聞し合をく
今日もくめて掛向ひひひりその軍立のくひ
くひ事たどくへ飛鳥の林と出没するも似て進退
自在ありまき水鳥の浪上も浮沈する如く變化相
と極めりし亂基是迄度々の軍も逢ひへとも今
日の戦ひも烈しく間あさ終り覺不申い何様
海道第一とある頃也申沙汰し濱松の軍法織
田殿と五人三人合をも及ふましく存い敗軍の
条よひへ御用ひあるましくいへとも能々御思

慮あるへくひ只今御打出て御合戦いへとも
も直さば賤岳の佐久間玄蕃と同一列あるへくひ
まつく大山へ御引返り地理と御考ありて待をま
ふくくひ掛るへ軍も非とと但馬守詞と盡し
諫めしらの勝入齋も尤いゆめのみ古兵よし
然も遠三の武邊と長篠妖川よく見たりとあり
へ最ともひひ大山の段の上も陣ととりて遠三の
兵士あせしと待うけさる

甫庵本よ大山より勝入父子稻葉伊豫守子息右
京亮郡上の両遠藤都合其勢三万余騎大山の段
の下も陣と備へ有ける武藏守敗北のよと

聞是より掛つて合戦を挑む勝負と決さんと勝
入身とのんて勇ましくとも誰やらん勝入の陣
ふ掛あさうりあの競ひ来る旗先よりよりあの
利あるるへ此勢と上の段へ引あけ御待ひへ
と申けり有

池田り勢の三万余騎三手よ分て備と立る稻葉入
道一鉄齋の老人のいも強氣の人あまの若き人
人に向ひ今日の一番合戦の古入道り請取た
るをや老後の腕たぬ軍よ花と開く呉んとい
ふより早く鎧あつとよりよりと打あり力もいま
た相應あり老の波血の川またくえて面々の興と

もよよと云てのりくと笑ひ少下さ處よ
馬と引立さを今やと待とみる氣色をよあめた
のりよ此時濱松よの羽黒表へ御到着ありける
よより松平主殿助奥平九八郎等の大山へ押寄有
無のつととあさるやと既よ人数と押出さん
とひよける處へ濱松の物見より帰言上り
るへ池田勝入齋の短氣ののめあさるりめ段
の下よ和へ今の上の段よ備と立ては是の當方の
寄ると待て勝負と決さんと計と見えはそ
傍よ稻葉一鉄父子も見えては注進しけり聞
食とさも有へささる池田勝入あり一鉄あり場

て時をうのつとも伏兵も見えれば若人らの口々に
老人の長詮議こそうと追へ敵を追うげに
あつて手柄とあつてこの口惜さと私語ひる
うち日ハ西山に傾る池田稻葉も引入んことを
一頃丹羽勘助榊原小平太以下三四千人あつて
あつて起りたる小牧山へ引入げると見ると一
て一鉄のひつる如く伏勢ありけりこそ一めを
しる壯士たら舌をふるうて感へけりけり
くやうとけりけりひあわの伏勢よあつて軍難
義あるへこそ一鉄の老功よもう敗軍の上よ
危ふるも軍と慎こそこそいふも何も場敷

の功とはあつて池田勝入齋の遠三の勢と
打破す種々この相違をいと無念
よあつて肺肝を苦め秀吉郷の出陣と今やと
なまじり

羽柴宰相秀吉郷大坂首途の事

酒井左衛門尉忠次秀吉郷の軍配と知事

濱松の御勢事故あつて小牧山へ引取伏勢とあり
丹羽榊原志ゆくと御本陣へ入ける然ハ勝關の
式を行とるアと首帳と調へ次第よありて實
檢と歴ける野呂助左衛門首松平又七郎打捕之
と云時又七郎助左衛門ハ近國に聞えたる大力の

大陽言方多卷十一
七五
勇士あり其方實に打取しよと御尋の時又七郎
謹て申上げらる私組伏らる既討討へりり處
へ家臣等落つさるり助けゆらり討取申ゆと有
のよき言上しけき御感状と被下りの家臣等
へも同し御感状と被下り次奥平九八郎と
ゆき上りて鬼といき森と討明しけき莫
大の忠功ありとて福岡一文字の御刀と被下り
功の次第に依て恩賞と行われ抑小牧山の御陣
營の榊原小平太康政の言上とて處らる酒井左
衛門尉に能見とてのち柵と結堀とありとて
とあり其外春日井郡小幡よの本多豊後守廣孝穂

坂常陸と置と岩崎の砦の丹羽勘次氏次と籠ら
せ廿四日御本陣の經營より廿八日よの
悉く出来し北畠殿と共に爰と御本陣と定めぬ
清洲の本丸よの内藤三左衛門信成二三の丸よの
三宅總右衛門康貞大澤兵部大輔基宿安藤彦四郎
等と置ぬその外蟹清水外山邊も要害とあり
へて遠三の通路と自由とて此事大山へも聞え
しうの早馬と以て大坂へ注進しけき天正十二
年三月廿一日羽柴宰相秀吉郷十二万余騎と率
て大坂と進發ありし先陣はと大山のたか
たある大豆戸の渡と打越大山五郎九邊と陣とつ

大陽言方多卷十一

ら孫村々里々軍勢ありぬ處もあし廿四日大垣城
の著あひひあしよて軍勢の手配をふしあふ一番左
備へ日根野備中守弘成舎弟彌次右衛門弘隆父子
五人よ長谷川藤五郎秀一と添らとたり其勢二千
六百余騎右備へ筒井法印り家督四郎定次家臣飯
田三郎次郎箸尾宮内其勢五千三百余人中の手へ
三好孫四郎秀次一柳市久直盛堀尾茂助吉晴一万
余騎あり二番の左へ長岡越中守忠興六千余人右
へ堀久太郎秀政小川土佐守三千七百余人中備へ
蒲生忠三郎氏郷木下半右衛門二千八百余人三番
の左へ氏家内膳正徳永石見守入道二千人右へ中

川藤兵衛秀重同平右衛門千九百余人中備へ蜂須
賀小六家政宮部善祥坊三千五百余人生駒市左衛
門一政世良田左馬助牧村長兵衛三千五百余人右
へ黒田官兵衛孝高三千余人中備へ伊藤掃部助前
野勝右衛門山内猪右衛門千五百余人五番の左へ
木村小隼人三千五百余人右へ高山右近大夫金森
五郎八入道明石與四郎七千餘騎中備へ丹羽五郎
左衛門尉八千餘人六番の左へ加藤虎之助清正同
孫六喜明尼子六郎左衛門三千七百余人右へ福嶋
市松正則脇坂甚内安治平野權平長泰四千二百余
人中備へ野々村肥前守山名右衛門大夫豊國粕屋

大隱言大統卷十一
五
助右衛門武則七千余人あとの本陣に近き故其人
と撰くも一なり七番の本陣秀吉郷あり御供の人
人の毛利河内守秀頼伊木半七櫻井元吉伊東主計
赤松彌三郎竹中半兵衛重俊平野九右衛門其外近
習馬廻りの面々前後左右に備たり片桐助作の近
習小性の支配役として大将の側とてかたが本陣
に組入此時石田元吉三成も片桐と同く御座の
側と伺ふとて此手の總軍三万余人後陣の蜂屋出
羽守頼隆淺野彌兵衛長政畠田平元衛門津田小三
郎拓植與元衛門古田内匠頭戸田彦三郎宮城藤右
衛門以下一万八千余人兵糧以下雜事として是と

奉行と都合十二万八千余人とあり
一書ふ本陣三万餘人と云譯と記して云くやの
大将の馬廻り廿四人あり此廿四人ののをも侍
十人小者三十人と召連たり合せて九百八十餘
人近習組五十人宛五組二百五十人此衆各侍十
二人小者三十六人と召連合とて一万二千二
百五十人使番組三十人宛十組三百人此衆侍十
五人小者四十人合とて一万六千八百人あると
本陣の三万余人と定む馬廻り廿四人の六人の
川組て大将の馬の左右に三人宛當番一非番十
八人の前と後と列とあり近習五組つゝ當番一

廿五人宛左右に列と非番四組に前後に列を使
番十組に二組つて當番はとつたり
廿七日犬山に著陣ありて直に諸軍を從へ樂田羽
黒の邊より巡見しあひ青塚に本陣を居りて淺野
彌兵衛尉富田平九衛門尉戸田彦三郎と召て敵陣
の様と試しいへと仰付らばそのうち總軍旗の手
と動り給ひしうら遠三の陣々色めと立て見え
ゆると秀吉金の唐冠の兜に前立後立脇立中立一
て緋威の鎧に緑の羽織者道標うらやとほげ白月
毛の馬に紫綵の手綱うけてゆるりと歩行をのり
人もあひ見えしうら遠三の諸侍おれと見

て大将あるへあまうら落付うら我々と這虫不
とももあひぬ氣色のよきこよ一當あて肝と
ひしうらやと陣々よこらうら騷立鉄炮を打うけ
んとひしめさけると秀吉郷に悠々と見渡しあひ
猶も進んで近々と馬と立ちあふよあり然に上方勢
戦と持と見えたるを敵のめくぬ先よ此方より
押寄んととゆり雄の侍のつまもく馬を進めく
軍奉行の至るとまの上方勢に十二万餘味方へん
つらよ四方に足ぬ小勢あり對揚をへく見えさ
うけり秀吉馬と立直し小牧山に向ひて鞭を以て
物とうと入る体とありまこらうらと笑ひあふを

三州勢と見えて悪し秀吉何事と笑ふや其まの
 み帰るといふと若殿原とて駈出んとあけけるを
 酒井左衛門尉忠次大須賀五郎左衛門尉康高馳まゝとて諸
 軍を制し日もくや申の刻を今日へ軍へあるまゝとて
 面々を清洲より兵糧馬草と用意しとて下知し
 兩人の御前へ参上し上方勢の鶴翼の陣とていへとも今
 日へ軍と持申すべたし例の秀吉の大器と示しつ陣を取
 固めんう為と存いたし此御陣中へ忍びの入てやいせん
 とせん例の立をく居とて御下知いしと申沙汰
 しそのら大須賀五郎左衛門味方と馳廻り今日へ軍へあ
 るまゝとて何も面々の陣中とて取鎮め申さるべし

上方の忍び多く入ていしと觸し陣々と子細し人を攻めけるを
 諸物頭いふといふと近々と奇の敵のうらぬとい何と
 以て申されいよと不審とれ忠次康高同し申ける様されい大
 垣より今日来り勢共也大河と三河を越て十里よ及ぶ道あり
 秀吉い猛くとも士卒は何とも凡人あり脚も金よあるべ日
 とて夕陽あり夜合戦の危あることなとも知たる上あるのど但
 の大軍とてと推出たとい土壇と築とておわえいり又敵
 りは掛いしとてと誠し天の與ある處いへとも決しとてり不
 申いと申切て酒井大須賀のとも本陣へ引入るそのら小牧山
 の御陣中と攻めると一處陣々あり三人四人つ何とも知ぬ夫人
 とこの走出て雲と霞と逃失たり是と引捕えんと近寄却て手と

頁ののちありけしハ弥酒井大湏賀の心付しと感しけりそのち
 一夜あけしハ朝霞の間より見ると昨日のさかると秀吉の軍
 勢のきたるあとも主俵りて塙と高く築上柵と結堀とあり（厳重の陣城と
うまのくらとあり）
 浦庵本は三月廿一日大坂とまゐり宇治瀬田邊にわたり勢も次第に打
 ちあがり廿三日四日より先勢大山の下大豆戸の渡で越え大山五郎丸邊より著
 廿七日午刻より秀吉卿大山城に入らむし未刻より樂田羽黒邊より諸
 大名衆召しよらむと打て出小牧山に對し向城とあり梅ヶ原とあり評
 定あり二重堀の要害の先手ありとて日根野備中守舎房彌次右衛
 門尉子供五人其勢二千余入置る岩崎の山に稻葉父子四千余小松
 寺城に丹羽五郎左衛門尉八千余青塚の森武藏守三千余内六辻山
 蜂屋出羽金木林五郎八千余とあり

重修真書太閤記九編卷之廿一終

